

Title	日米医学部学生の臨床研修交流
Sub Title	
Author	安田, 健次郎(Yasuda, Kenjiro)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2008
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.85, No.1 (2008. 4) ,p.1- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20080400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特別寄稿

日米医学部学生の臨床研修交流

慶應義塾大学名誉教授

やす だ けん じろう
安田 健次郎

安達正純先生（32回）が平成17年度瑞宝中綬賞を受章された。心から慶賀を申し上げる。功労概要は日・米学術交流功労である。先生はニューヨーク州立大学医学部病理学教授であり、元米国日系医師会会長である（医学部新聞、第649号、平成17年11月20日発行）。先生自身は「受賞の対象は主に神経系悪性腫瘍をエフ・エム・シイ ウイルスによる実験的完全治療による」と書かれている（同新聞、第650号、平成17年12月20日発行）。研究・教育における日米交流推進の功労による受章と理解される。

数年前に、先生が来日された折に下さった絵には、ベイブリッジが描かれており、上部に先生の直筆で「21世紀の国際交流の橋」との表題と安達正純の署名が記されている。先生が常に日米両国間の交流を進める為の橋渡しの役割を念頭に置いておられた事を物語っている。本学医学部の日米交流学生臨床研修も安達先生の申し出によって始められたものである。すなわち先生は米国の大学医学部間に学生交流の制度があり、外国の学生にも門戸が開かれている大学が多い事から、母校の学生もこの様な機会を利用したら若いうちから米国の医学教育の内容を知ることが出来、将来の活動に役立つと判断されたのであろう。先生はこの制度の活用を母校に薦め、学生の臨床研修につき日米相互の医学部間の交流を提案された。ここでは、今回の安達先生叙勲の機会に、先生の提案によって始まった医学部学生の米国における臨床研修発足時の経緯とその後数年間の状況を記す。そして、この交流の実現及び実施の過程で示された学の内外の多くの先生方の協力・支援の一端を紹介する。

昭和56年（1981）に安達先生が来日された際に、当時の浅見敬三医学部長に会われ、米国の大学相互間の医学生研修交流の実情と外国の医学生にも門戸が開かれている大学が多い状況を説明され、塾の医学部学生の米国大学医学部および医科大学における短期留学の形による臨床研修が可能である事を紹介された。そして、先生は

あらかじめ2～3の大学に打診した処、皆歓迎の意を表している事を話され、受け入れ態勢は十分に整っているので本学医学部学生が米国大学医学部等で臨床研修を行う事を考えられては如何ですかと進言された。私はたまたま国外に出張中で不在であった。後日、浅見医学部長は私を呼ばれ「安達君から医学部学生の日米間の学生交流研修の提案があった。連絡をとり、米国の大学医学部間の交流の体制と実情を詳しく聞いて欲しい。そしてこの交流研修が本学の学生にとって有意義であり、かつ実行可能であると判断されたら、実現に向かって話を進めて欲しい。なお、この件は学生部の扱いとして進めたらどうだろうか」と言われた。戦後、医師の外国留学は盛んであったが、短期間であるとはいえ、学生の海外留学・臨床研修は当時の日本では初めて耳にした話であった。早速文通により計画の概要をお聞きし、昭和57年から58年にかけて、学会発表の為に海外へ出る機会にその都度ニューヨークに寄り数回先生にお会いし、米国の大学間の学生交流の現状をお伺いし、日米学生交流医学研修の具体化の方法を討議した。この計画は、先生がニューヨーク医科大学の芦刈宏之外科学教授（37回）と相計られたものであったと伺った。当時、安達先生はアルバート・アインシュタイン医科大学の神経病理学の教授であり、米国日系医師会会長であった。私は塾の学生部副部長すなわち医学部学生部長であった。58年（1983）秋にニューヨークの吉兆でお目に掛かった折りに最終的な実施要項が纏まった。その内容は（1）日米相互に臨床研修の学生を交換する、（2）医学部最高学年の学生で医学部長および学生部長の推薦状のある学生の派遣、（3）現地の大学・病院の一般規約に従う事、（4）時期は夏期休暇中で期間は約1ヶ月、（5）研修希望者および各人の研修希望科目はあらかじめ連絡調整しておく、（6）希望があれば研修終了の証明証を発行する、（7）3ヶ月までは授業料は免除、（8）将来は研修の成績互換も検討する、（9）宿泊は互いに大学で便宜を計る

(アパート、ホームステイの世話等である。なお、米国側は夏期休暇中のドームトリーを使用させる場合が多い)、(10) 渡航費用・保険、生活費等は自己負担とする、(11) 日本側学生は英語会話の習熟、米国の学生は日本語の習熟が望ましいが出来ない場合には少なくとも日常会話は理解する力がある事、等であった。その時点では、安達先生はアルバート・アインシュタイン医科大学、ニューヨーク医科大学、チューレン大学医学部、メイヨークリニックには既に了解をとってあると話された。帰国後学部長に具体化の可能性が十分にある事を報告し、教授会で計画実行の了承を得、また、臨床各科に米国側から志願者があった場合には受け入れていただける事を確認し、塾に学生の日米交流臨床研修の了解を得て、いよいよ実行に移る事になった。学生さんに主旨と実施方法を発表し、希望者は申し出るように掲示した。

第一回学生派遣：昭和58年12月17日に第一次選考を行い、研修を希望する大学を聞き、渡航費、生活費および保険等の自己負担の可能性を確認し、英語会話の練習をしておくように話した。そして昭和59年(1984)6月18日に第二次選考として英語による面接を行った。場所は現在の孝養舎と第一MRI棟との中間の位置にあった木造の小さな学生部の会議室であった。私が5人の学生さんと、個別に英語で15~30分ずつ話をし、会話の状態を確認した。それぞれ、十分に備えてあった。中に帰国子女制度で入学してきた学生さんがおり、面接者の私よりも流暢な英語で高等学校のあったサンフランシスコ周辺の話をしてくれたりして少々恐縮した面接もあった。かくして、64回生5人は7月終わりに出発した。ここに至るまでの事務処理は荒勇および並木一郎の両学生部職員にお願いしていた。この年は、アルバート・アインシュタイン医科大学に二人とニューヨーク医科大学に三人留学した。学生はニューヨークで安達先生と接触していろいろお世話いただき、芦刈先生はニューヨーク医科大学のドームトリーや食事の費用の軽減を交渉して下さる等大変お世話になったと報告された。研修を終了し帰国の直前にはニューヨーク在住の先輩の先生のお宅で送別会をしていただいたと聞いた。

第二回学生派遣：昭和60年(1985)には1月26日に第一次選考を行い、5月13日に英語による面接すなわち第二次選考を行った。この年は学生部委員の牧野恒久、高坂新一、久保敦司の諸先生と私とが二人ずつ組んで65回生4人の志願者の面接を行った。結果としてメイヨークリニックに一人、ニューヨーク医科大学に二人、アルバート・アインシュタイン医科大学に一人留学した。選考とは別に私は同年4月30日にコーネル大学医学部

にてート医学部長を訪ね慶應義塾大学医学部との医学生との交流臨床研修の提案をし、前記11項目について討議し賛同を得た。メイヨークリニック大学は、安達先生が同大学の岡崎春雄先生(学外)に依頼されており、慶應の学生の交流臨床研修への道は既に開けていた。研修に行った学生は岡崎先生と丸田俊彦先生(50回、現・埼玉県立精神医療センター病院長)に大変世話になったと報告されている(第二回派遣学生、水野雅文先生談、65回)。また、5月6日にはニューヨークで芦刈教授にお会いし、研修学生に寄せられた多大な御厚情に謝意を表し、今後とも御援助をお願いした。また、同時期にシカゴのノースウェスタン大学医学部の医学部長ビーチ教授を訪ね、交流研修の提案をした。副医学部長を含めて数人のスタッフと11項目を中心に会談したが非常に積極的に医師の交流も含めて実現の努力を約した。また、交流学生の世話は同大学の同窓会がみるとの事であった。大学と交渉出来た経緯を説明すると、ニューヨーク医科大学教授の田崎寛先生(37回)にニューヨークで目に掛った際に友人の生原陸夫先生(学外)に接触する事を薦められた。同先生の父上は長い間米国で仕事をされており同先生は幼少の時から米国で育ち、ノースウェスタン大学医学部を卒業された医師である。以後は同先生にお願いして前記のように大学当局者との会談の運びとなった。その後も本学の学生に色々気を使って下さっていると報告されている。

第三回学生派遣：昭和61年(1986)も前2回と同様な手続きで66回生4人の研修を決めた。メイヨークリニック二人、ニューヨーク医科大学二人であった。同年9月から私は副学部長兼学務委員長を勤める事になった。これまで学生の米国大学医学部および医科大学での研修は課外活動に準じた扱いとして学生部が担当してきた。この研修は参加が自由意志によるものであり、一部の学生に限られており、夏期休暇中の活動であった。しかしながら3年度にわたる派遣の状況から見ると、この交流臨床研修は単なる課外活動とは異なり、学部長推薦の留学であり、交流の相手国の学生の教育にも責任があり、将来は成績互換の可能性もあり、臨床教育の一環として教育的意義が強いので、植村恭夫医学部長と相談し、この際学務委員会で扱う事になった。昭和61年(1986)9月8日の学務委員会において、委員会内に「学生海外交流委員会」を設け、その委員会が学生の海外臨床研修に関する事項を担当する事になった。9月17日、第一回の学生海外交流委員会が開かれ、委員の加藤隆一、西川武二、猿田亨男の三先生と私が集まり委員会の名称を確認し、構成する委員数を定め選出した。前記3名の委

員と次の6名の先生方をお願いする事になった。すなわち、河合 健（内科）、相川直樹（外科）、松尾宣武（小児科）、牧野恒久（産婦人科）、実川正道（泌尿器科）、山本 慧（薬理学）の先生方であり、計9名から成る委員会が構成され、加藤隆一教授に委員長をお願いする事になった。この時点で、私は学生派遣の学生選考、相手大学との事務的交渉等の実務から離れ、交流先の大学の範囲を広げる方向に向かった。相変わらず国外の学会に出題する事が多かったので、以前と同じくその機会を利用して交流相手大学の開拓を続けた。いずれの大学に対しても前記の11項目を中心に話を進め慶應義塾大学医学部との学生交流による臨床研修を提案した。

昭和61年（1986）6月12日にハーヴァード大学医学部トステソン医学部長を訪問した。彼は私が会長をしていたエール会（日本ハーヴァード大学医学部同窓会）に招いた事もあり、気楽に話が出来の間柄にあった。ハーヴァード大学医学部には、牛場大蔵先生（14回、細菌免疫学教授）と塚田祐三先生（26回、生理学教授、留学先は生化学教室）とが留学されており、私も留学（細菌免疫学教室）していたので本学医学部の状況を良く知っていた。留学当時に挨拶に行き見覚えのある医学部長室で医学部長、学生部長、エムディ・ピーエッチディ・コース責任者等と会談した。理解は早く、交流研修は早々に決まった。帰り掛けに留学時の研究室を訪ねてみたが、師のクーンズ教授は既に他界されておりデイヴィス教授は退職され、一人の技術員を除いて知らない教室員ばかりであった。留学から25年という年月の長さを実感した。続いて、6月18日にニューオリンズに飛びチュレン大学医学部でハムリン医学部長、サルヴァジオ内科教授等に会い学生の受け入れを正式に申し入れた。ここでは、安達先生から同大学生生化学教授の有村 章先生（学外）に既に交流研修の希望が伝えられており、同教授から医学部長に話は伝わっていたので、手続としては交流受け入れの了承を確認したのみであった。むしろ、実務的に交流開始の時期、研修科目の設定、宿泊の可能性等を打ち合わせた。会談終了後、有村先生が先生の生化学の研究室に案内して下さった。ミシシッピ川の近くで静かな道路に面した、コンクリート製のビルではなく学校の校舎風の建物であった。周辺は南方独特の森で、道路を隔てて向い側には灌木と背の高い草に囲まれた沼か池があった。この地区は昨年大きなハリケーンに見舞われ、暴風雨と洪水により大被害を被ったと伝えられた。有村先生の研究室は道路から石段を数段登った高さの所に入口があり小規模の出水ならば耐えられるであろうが、ミシシッピ川が氾濫する様な大洪水ではどうであろう

かと案じていた。最近の情報では、先生は自宅から他の場所に逃避されて無事であられたと聞き安堵した。臨床研修の学生も災害に会った。苦勞して生活しながら、留学に来ていた日本の他大学の先生の逃れて他市に脱出し、無事に帰国する事が出来たと報告されている（平成17年度外国派遣学生報告、医学部国際交流委員会発行）。予想も出来ない大災害に冷静に対応し無事帰国された事を慶び、その的確な判断と勇氣に満ちた行動を心から賞賛する。昭和63年（1988）6月8日、エール大学のギフォード医学部長を訪ねた。この訪問は本学富田恒男先生（10回、生理学教授）の御好意によって実現した。富田先生は以前に2年間訪問研究員としてエール大学の眼科学教室で網膜の研究と指導をしておられた事から眼科のシアーズ教授とは昵懇の仲であった。私は富田先生をお願いしてシアーズ教授に、慶應が学生研修をしている事を伝えていただき、その交渉のために訪ねる私を紹介していただいた。現地到着後、先ずシアーズ教授にお目に掛かり共に医学部長に面会した。話は既に伝わっていた。エール大学には以前から海外学生の受け入れの体制はあったが、語学上の問題で暫く受入を中止していた。しかし、慶應大学との交流ならば是非とも話に乗り度いと賛同を得た。帰りにニューヨークに寄り安達先生にお会いし、日米双方の派遣と受け入れの状況を分析し、問題ない事を確認し、次の計画を話し合った。平成3年（1991）4月30日にペンシルヴァニア大学医学部を訪問し臨床研修の相互受け入れを提案した。この大学との折衝の手懸かりは、石村 巽先生（医化学教授）の友人で同大学医学部生化学の米谷 隆教授（学外）の好意ある提案によるものであった。私はあらかじめケリー医学部長に手紙で面会と相互研修の提案を申し入れてあった。それに対して、慶應との交流を歓迎する。ただ、4月30日は自分は不在なのでバーグ教育担当学部長他数名のスタッフと会談していただきたいとの返事であった。当日は8人のスタッフと会談した。学術交流や臨床研修の受け入れについては積極的に賛意を示し、さらに学生の一年間の交流をも提案された。しかし、この提案については、価値は大きい为实现はどうであろうかと意見を述べ懸案のままにしてある。会談したスタッフの中に生理学の林田 基助教授（37回）がおられた。私と同級（33回）の林田 明君（故人）の実弟にあられる。学生が来たら宜しくとお願いしてきた。先生は後日帰国された（現横浜市舞岡病院長）。この大学はベンジャミン・フランクリンが創立した大学で、以前から日本の古い私立大学との交流を望んでいた。医学部学生の臨床研修の交流の折衝とは別に、同年3月5日には前学長のマイヤー

ソン教授が本塾を訪れ全学部の研究者の交流を提案しておられた。ジョーンズ・ホプキン大学での研修は平成元年から始まったが、交流の最初の交渉は昭和58～59年であったと記憶する。しかし、細部についての記録が不十分であるので交流開始およびその後の状況は同大学への最初に派遣学生であった井上仁人先生(69回, 外科)の書簡により記載する。同大学には里吉栄二郎先生(25回, 内科)が古くから関係があり、飯塚理八先生(27回, 産婦人科教授)が産婦人科のワラック教授と知り合いであった事から交流が始まったと伝えられる。学生は渡航前に、同大学に留学歴のある田辺清男(51回, 産婦人科)、田中靖彦(45回, 眼科)、及び余語毅男(31回, 小児科)の諸先生からの助言をいただいた。現地では当時留学中の遠藤勝英先生(60回, 産婦人科)に大変お世話になったと報告されている。

私はこの年に定年退職した。交流の提案があってから5年目、米国での研修が始まってから3年目であった。安達先生が下さった絵は、正に日米学術交流の架け橋としての役割を自認された先生の心境と意気込みを象徴するものである。そして、先生がその一環として母校に撒かれた学生臨床研修交流の種は発芽し着実に大きく育ち、現在は国際交流委員会が推進しておられる。浅見敬三医学部長の英断は大きく実り、学事課によると、初回は年5人であった交流学生数は、最近の報告を見ると今や毎年12～15人に届く程にもなり、派遣開始後22年間で計228人が派遣された。交流先の大学医学部及び医科

大学は前述の7大学にコロンビア大学、ハワイ大学およびマウント・サイナイ医科大学が加わり、計10校に達している。米国からの研修学生も毎年4～5名来日し、この計画は順調に進展している。他校には見られないこの教育課程の採用を塾に勧められた安達先生の御尽力は勿論であるが、交流の準備および実施の過程で芦刈先生をはじめ学の内外を問わず多くの先生方からいただいた暖かい御支援は有難い事であった。なお芦刈先生は経済的援助を含めて多大な貢献をして下さり平成14年に日本政府から勲三等瑞宝賞を授与された。

以上、安達正純先生の叙勲を祝し、先生からいただいた日米交流の架け橋の絵を紹介しながら、学生海外臨床研修につき、主としてその発足から学生海外交流委員会が担当されるまでの経過の概要を記した。先輩の先生方が作り育てられたこのシステムは米国を通じて世界の医学・医療の一端を知る意味で学生にとって大きな収穫が期待出来、また、米国からの研修学生を受け入れている状況から、交流を通じて本学の医学教育の視野を大きく広げる行事である。今後益々の発展を願って止まない。

追記：チューレン大学の有村 章先生は平成19年12月10日ニューオリンズの自宅で逝去された。ここに、学生の臨床研修交流を通じ、本学医学部にお寄せいただいた長年の御厚情に心から感謝の意を捧げると共に、先生のご冥福をお祈り申し上げる次第である。